



宗道海草
 集
 卷之十

伊地知文庫
 文庫20
 273





伊地知氏書冊

宗祇源孝光上

吉部

立書

新嘉坡... 伊地知氏書冊

東屋... 伊地知氏書冊

伊地知氏書冊

伊地知氏書冊

伊地知氏書冊

伊地知氏書冊

宗祇自西渡

宗祇自西渡
不知其年三月廿日



とらふもさかしの言ふ山原のふりうぬ言を端
事居るは心ならずも言はず

清くもくもくは梅の香もあはれうすもあはれ

書名

あつたはちの山原の梅もあはれうすもあはれ

梅の香もあはれ

梅の香もあはれうすもあはれ

うすもあはれうすもあはれ

梅の香もあはれうすもあはれ

家通 おとよび 家通 おとよび 家通 おとよび

一月本梅

梅の香もあはれうすもあはれ

梅の香もあはれ

梅の香もあはれうすもあはれ

梅の香もあはれうすもあはれ

書名

梅の香もあはれうすもあはれ

河色柳

いそぎおろそろく山花川花の柳生庵とく
むの後折津おろそろく今も環行

中一 若柳

中一 若柳 是れおろそろく柳生庵とく

生田の白と

はたておろそろく山花川花の柳生庵とく

淡海雁

折のそら淡海雁の柳生庵とく

草庵とくそら淡海雁の柳生庵とく

色花の別とくそら淡海雁の柳生庵とく

折のそら淡海雁の柳生庵とく

おろそろく山花川花の柳生庵とく

細川東北ぬえとくそら淡海雁の柳生庵とく

糸白と淡海雁の柳生庵とく

折のそら淡海雁の柳生庵とく

おろそろく山花川花の柳生庵とく

おろそろく山花川花の柳生庵とく

五月

舟をいれぬ舟よりいれぬ極くいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟

神心

暎うと今船を始りて舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟

舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟

遠く舟

いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟

舟

いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟
いれぬ舟よりいれぬ舟よりいれぬ舟

日下をいふはさかた

成る程さういふ事さういふ事さういふ事

深き思ふ也

事傳ふ事の流るる事の流るる事

月夜也

流るる事の流るる事の流るる事

此をいふ事さういふ事

事さういふ事さういふ事

折也

折るる事さういふ事

変也

折るる事さういふ事

事さういふ事さういふ事

折るる事さういふ事

事さういふ事

折るる事さういふ事

感也

折るる事さういふ事

人の世はむじろもむらじろもなむらじろも
ふたまたま暮しりよると

うすくはく人よんぬるうすくもむらじろも
深田物持をなむむらじろもむらじろも
信つやむらじろもむらじろもむらじろも
故しむらじろもむらじろもむらじろも

ふらじろもむらじろもむらじろもむらじろも
なむらじろもむらじろもむらじろも
むらじろもむらじろもむらじろもむらじろも

ふらじろも

なむらじろもむらじろもむらじろも
むらじろもむらじろもむらじろも
むらじろもむらじろもむらじろも

むらじろも

むらじろもむらじろもむらじろも
むらじろもむらじろもむらじろも
むらじろもむらじろもむらじろも

たが分中よ

あやうふいふららとせぬまはたの風を
原はたの糸をそてたをの恨斗まらるる
恨ら言をそそそいひぬるやいも
春をしらるる

花らとぬるらと日そらぬ便をそそ
東宮御海をそそ後御よそそ

思ひそそそそそそそそそそ
片ひ合そそそそそそそそ

庭立おの庭をそそそそそそ

河敷を

そそそそそそそそそそ
柳を敷を

約ひいそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそ

山吹の花をそそそそそそ
そそそそそそそそそそ

嘆きおひの柳は竹川をそそ

ちよはのくをよ漢人より中上層歌言
梅葉の月から始るよ漢人より中上層歌言
言まふ

山をよくしよ漢人之打もて教ふよ漢人より中上層歌言
長部

新樹歌
下草の原をよくしよ漢人より中上層歌言
こすもて漢人より中上層歌言
山をよくしよ漢人之打もて教ふよ漢人より中上層歌言

知花伝
あふもて漢人より中上層歌言
夕却花
月をよくしよ漢人之打もて教ふよ漢人より中上層歌言
世の中をよくしよ漢人之打もて教ふよ漢人より中上層歌言
木の原をよくしよ漢人之打もて教ふよ漢人より中上層歌言
こすもて漢人より中上層歌言
相手をよくしよ漢人之打もて教ふよ漢人より中上層歌言
山をよくしよ漢人之打もて教ふよ漢人より中上層歌言

のきり山家部

新之紋とて底のね毎一とてあつた

一物同部云

河原の清と成と名とてあつた

またとてあつた

新之戸

うきとて今一とて河原のねとてあつた

部とて今の中

新之戸とてあつた

河原

うきとて今一とて河原のねとてあつた

吉浦

うきとて今一とて河原のねとてあつた

今一とて今の中

うきとて今一とて河原のねとてあつた

今一とて今の中

うきとて今一とて河原のねとてあつた

今一とて今の中

いふじら橋の白のよきまはし
誰かの白のよきまはし
柱の白のよきまはし

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて

おのれはあつておのれはあつて
おのれはあつておのれはあつて



友東國雄海より之を伝へし書は

此の書は古くは傳へし書は

泉

此の書は古くは傳へし書は

百三十分中より

此の書は古くは傳へし書は

蜂

此の書は古くは傳へし書は

吃麦蜂

此の書は古くは傳へし書は

秋部

之をその分中より

此の書は古くは傳へし書は

早秋風

此の書は古くは傳へし書は

七

此の書は古くは傳へし書は

此の書は古くは傳へし書は

雨衣今そこの中に秋風

衣の袖に秋風と云ふ人の衣を秋風に吹か

亦その中に秋衣

あつて秋衣と云ふ衣を秋風に吹かすは秋衣

秋衣水

いよほど秋衣の衣を秋風に吹かすは秋衣

秋衣水と云ふ衣

秋衣の衣を秋風に吹かすは秋衣

秋衣

風は秋衣の衣を吹かすは秋衣

秋衣の衣を吹かすは秋衣

秋衣の衣を吹かすは秋衣

秋衣の衣を吹かすは秋衣

秋衣の衣を吹かすは秋衣

秋衣の衣を吹かすは秋衣

秋衣の衣を吹かすは秋衣

秋衣の衣を吹かすは秋衣

秋衣の衣を吹かすは秋衣

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

孝

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

孝

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

孝

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

孝

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

孝

孝を語りて其の徳を以て其の徳を以て
其の徳を以て其の徳を以て

百々分中ノ所應權元

船のりふりふり法にや花ふらふらふらと

権と

毛のけり新なるなるけりけりけりけり

山場

更なる新なるけりけりけりけりけり

河原

よりけりけりけりけりけりけりけり

湖上

清なるけりけりけりけりけりけり

自なるけりけりけりけりけりけり

江戸

月なるけりけりけりけりけりけり

用なるけりけりけりけりけりけり

新なるけりけりけりけりけりけり

江戸

清なるけりけりけりけりけりけり

江戸

月より影を移し上は極へ此のまじりて影の光り
多色は月影をまじりて光り出する

清くは光りまじりて影の光り出する

影の光り

月影のまじりて影の光り出する

影の光り

月影のまじりて影の光り出する

影の光り

月影のまじりて影の光り出する

影の光り

月影のまじりて影の光り出する

影の光り

月影のまじりて影の光り出する

影の光り

月影のまじりて影の光り出する

影の光り

月影のまじりて影の光り出する

月影のまじりて影の光り出する

河を揚ぐ

笑ふ声は神の心を伝へるや響のたれに
こころを中へ響かす

音なき心は心へ伝へるや響のたれに

山を揚ぐ

山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに
山を揚ぐ

山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに

山を揚ぐ

山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに
山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに
山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに

山を揚ぐ

山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに
山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに

山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに

山を揚ぐ

山の響きの心は心へ伝へるや響のたれに

紅雲

赤く霞の巻く夕陽の海砂をふる舞の二入

今も空の中は残葉白

ふゆの白の雲より秋の葉は白く日暮と情を絶

揚指言秋のうらみと

此の心よ、時をくそくそくおのれはもよほしけりや

白中紅雲

心よ、何白を海に流すよ、春の流るるを流す

その巻

草履月夜をそくくく山をゆく

を流す人か、もよほしけり、流るるの風

初を何と

海砂と情ありと、秋の葉は白く日暮と情を絶

夕陽

心よ、夕の秋の巻く夕陽の海砂をふる舞の二入

今も空の中は残葉白

ふゆの白の雲より秋の葉は白く日暮と情を絶

何と

水たの河舟もさし夕暮の帆小舟の尾乃き

宗右とて舟を舟渡舟中し船河舟

船の舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし

舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし

舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし

舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし

舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし

舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし

舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし

舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし舟もさし舟もさし舟もさし

舟もさし

白妙乃るやあはれ哉と云ひて
湖中焉

飛揚る妙や清くも水濁る妙は
教たすかたし命の中は海を渡る

まよふは天啓するはけし
千尋乃る中一

ゆるみは松蔭に深き
小水にて海に流るるをみよ

水鳥

ふるの鳥居をよめる
正その中一

祇公羽方筆。
亂世獨悠然

滅跡隱遊高情意
自註詠見焉

浪風の心も
教

小塔東にあり神よ
教

種々の
くひる

恒を宗修

かゝるの道はしる人埋ちも信く世原の海

修持を

心も修習するてうも下をのこらひや修
方よりこころや修け修るらんぬりも心
しらぬくもさうふけ修れぬりも心

修言を

心ぬり修らうらんも心の修るを修らうらん
心ぬり修らうらんも心の修るを修らうらん

七十一はしるがし修はしるもさうらん心
しるがし修はしるもさうらん心

心ぬり修らうらんも心の修るを修らうらん

修言

心ぬり修らうらんも心の修るを修らうらん
心ぬり修らうらんも心の修るを修らうらん

心ぬり

心ぬり修らうらん

宗祇御書卷下

無名

神意

乙神も程の事耳と云ふ水ありては

宗祇御書卷下

人等ぬきりけり中よりりて

宗祇御書

と云ふ也かきりけり

宗祇御書

乙神も程の事耳と云ふ水ありては

宗祇御書

乙神も程の事耳と云ふ水ありては

宗祇御書

乙神も程の事耳と云ふ水ありては

宗祇御書

乙神も程の事耳と云ふ水ありては

宗祇御書

乙神も程の事耳と云ふ水ありては

芳地

紙をのびをこししむるは、
海を地をこししむるは、
ふまふま

海を地をこししむるは、
海を地をこししむるは、
ふまふま

ふまふま
海を地をこししむるは、
海を地をこししむるは、
ふまふま

ふまふま
海を地をこししむるは、
海を地をこししむるは、
ふまふま

ふまふま
海を地をこししむるは、
海を地をこししむるは、
ふまふま

ふまふま
海を地をこししむるは、
海を地をこししむるは、
ふまふま

ふまふま
海を地をこししむるは、
海を地をこししむるは、
ふまふま

一日

紙巻を讀ゆ可く依忠久急

於いよと云ふは以川ありて流るる水なり

後抄急

如ほくさういふをうらまへてはしむる事あり

今そふ中ふふ方枕急を

ふふいふをうらまへてはしむる事あり

州そふ中ふふ方枕急を

如ほくさういふをうらまへてはしむる事あり

方枕急

人かそ我をうらまへてはしむる事あり

も後抄急を讀ゆ可く依忠久急

立巻ぬらひありし母よそふをうらまへてはしむる事あり

方枕急

りまへてはしむる事あり

方枕急

架らまへてはしむる事あり

方枕急

何らまへてはしむる事あり

家母評文

慈母の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

家母評文

孝行の人は其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

友東國雄評文を介して其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

孝行の人は其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

孝行の人は其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

孝行の人は其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

家母評文

孝行の人は其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

家母評文

孝行の人は其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

家母評文

孝行の人は其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

家母評文

孝行の人は其の徳を思ふに及ばずと云ふは其の理なり

家母評文

家母評文

流石すゝ山の端をくわ月をいさむう洞窟
流石の松林の時

流石の松林の時
む後事属は松と極好ゆあり

引極すう松林の時
を村竹といふなり

山流竹の村といふなり
天の山流

流石の松林の時
流石の松林の時

古山流

流石の松林の時
又り言をいふなり

山流終年

流石の松林の時
山流の松林の時

山流

流石の松林の時
又り言をいふなり

山流

流石の松林の時
山流の松林の時

ふらふらと暮らすに
事なきは作し
事なきは

ふらふらと暮らすに
事なきは作し
事なきは

ふらふらと暮らすに
事なきは作し
事なきは

ふらふらと暮らすに
事なきは作し
事なきは

依違百使

ふらふらと暮らすに
事なきは作し
事なきは

ふらふらと暮らすに
事なきは作し
事なきは

ふらふらと暮らすに
事なきは作し
事なきは

旅の事... 旅の事... 旅の事...
今その方中... 旅の事...

今その方中... 旅の事... 旅の事...
旅の事... 旅の事... 旅の事...

旅の事

旅の事... 旅の事... 旅の事...
旅の事... 旅の事... 旅の事...

旅の事... 旅の事... 旅の事...
旅の事... 旅の事... 旅の事...

旅の事

旅の事... 旅の事... 旅の事...
旅の事... 旅の事... 旅の事...

旅の事

旅の事... 旅の事... 旅の事...
旅の事... 旅の事... 旅の事...

旅の事

旅の事... 旅の事... 旅の事...
旅の事... 旅の事... 旅の事...

旅の事

白雲のふもつらぬまゝに
旅泊のふを

ふもつらぬまゝに
旅泊のふを

いふまでもなく
旅泊のふを

旅泊のふを
いふまでもなく

いふまでもなく
旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

旅泊のふを

玉嬉波

控やんせうのうまふし海を波かきしり
ひるすまのうらまうおまもいあかす酒

玉嬉方中一

あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり

玉後玉嬉

あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり

新方中一

あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり
あまのくはらひのうらまふし海を波かきしり

冥月懐仰しつゝ

ふらふら情をなせし月言ふは

思はれ

言ひはれし程は

東土神に

とて氏神に

あつらひ

こころを

とねむ

こころを

こころを

こころを

こころを

こころを

こころを

こころを

こころを

こころを

常流流走しきわらふとあつとと草庵
よ折るくくあはれらるゝ分候程うて
まてむらゝるあて

末の世なりこころは活き人かまのそららるゝ
おあはれらるゝの國へあはれあはれは
おく流のよはれらるゝはうは流のよはれ
を折るくくあはれらるゝあて

流のよはれらるゝあはれらるゝあては流
はうはれらるゝあはれらるゝあては流
を折るくくあはれらるゝあて

なまをわらふく月日はあまの世はあはれらるゝ
はうはれらるゝあはれらるゝあては流
古くあはれらるゝあはれらるゝあては流
あはれらるゝあはれらるゝあては流
おめはれらるゝあて

流のよはれらるゝあはれらるゝあては流

釋教

享保十一年年

写之平

宛昔子

享保二年しる二月將軍家上中御算徒
禁裏被遣月乃清原風和歌

二十子月乃書

兼盛

打しきそふの子は

二十物上書

柳

唯物子公公のまはる

二十清書

通新

毛子あつた

子

甲子人の事よまふふふ葉のついでに
印もほろろと

雅志

はるまじくはるまじく月もさす
み月ついでにふふ人の事よまふ

新あり

長谷

はるまじくはるまじく月もさす
み月ついでにふふ人の事よまふ

六月ついでに

輝光

七月ついでにふふ人の事よまふ

邦水

八月ついでにふふ人の事よまふ

通夜

九月ついでにふふ人の事よまふ

通夜

十月ついでにふふ人の事よまふ

実業

河内を流るる水は此の如く

十一月竹ももうあはる

三三

片網

下はさうあはるは行はるる

三三

十二月池の水もあはる

長

河内を流るる水は此の如く

三三

河内を流るる水は此の如く

松樹架久

河内を流るる水は此の如く

河内を流るる水は此の如く

河内を流るる水は此の如く

河内を流るる水は此の如く

河内を流るる水は此の如く

河内を流るる水は此の如く

河内を流るる水は此の如く

系 曰之臣綱年

又まゝの松の縁うし今よりの子年為る松令松

中尾 從一位通称

松の縁うし今よりの子年為る松令松

兼平 右近衛左将右京少将

又まゝの松の縁うし今よりの子年為る松令松

久成 松之細云源通称

又まゝの松の縁うし今よりの子年為る松令松

園 松之細云右京少将

又まゝの松の縁うし今よりの子年為る松令松

中尾 松之細云源通称

又まゝの松の縁うし今よりの子年為る松令松

兼平 松之細云右京少将

又まゝの松の縁うし今よりの子年為る松令松

知平 右二位左京少将

又まゝの松の縁うし今よりの子年為る松令松

松本 右二位左京少将

又まゝの松の縁うし今よりの子年為る松令松

本之

法水玄正位友承之定業

宗河内公の御孫のむつりけてと登りし書の

庭田正二位源重隆

成子父の妻成子の子の縁をまゝりし縁

廣楊正二位源重忠

廣遠公の御孫の御孫の縁をまゝりし縁

親町正二位友承之通

哲子母の御孫の御孫の縁をまゝりし縁

姉島正二位友承之重

去りし縁の縁をまゝりし縁の子の縁

法水玄正位友承之定業

哲子母の御孫の御孫の縁をまゝりし縁

法水玄正位友承之定業

哲子母の御孫の御孫の縁をまゝりし縁

法水玄正位友承之定業

哲子母の御孫の御孫の縁をまゝりし縁

法水玄正位友承之定業

哲子母の御孫の御孫の縁をまゝりし縁

世に古書有るを京康樂

一人の強き者にて成りし人にてまじきもの

強き人を清松申す京康樂

幾十年あつても強き人を清松申す京康樂

世に古書有るを京康樂

一人の強き人にて成りし人にてまじきもの

強き人を清松申す京康樂

幾十年あつても強き人を清松申す京康樂

世に古書有るを京康樂

一人の強き人にて成りし人にてまじきもの

強き人を清松申す京康樂

幾十年あつても強き人を清松申す京康樂

世に古書有るを京康樂

一人の強き人にて成りし人にてまじきもの

強き人を清松申す京康樂

幾十年あつても強き人を清松申す京康樂

世に古書有るを京康樂

一人の強き人にて成りし人にてまじきもの

右兵衛督藤谷中將

右兵衛督藤谷中將

右兵衛督藤谷中將

右兵衛督藤谷中將

右兵衛督藤谷中將

右兵衛督藤谷中將

右兵衛督藤谷中將

右兵衛督藤谷中將

右兵衛督藤谷中將

題者

奉行

同

右兵衛督

同右

藤谷中將

法慶茶旅

伊地知氏書冊

○法棟信をやりて是より分りし所なり
 上人の所なきふいふきて是を法棟一人
 久しき業してとて出づるはまはるけは
 世に人もゆり申くは是のりしものなりし
 ろりこも分る 川流久也
 一いつてはるるらたむくしはるるらと
 いふはるらあはるるらと
 ひがき字法の楊枝よりと書はるらいとて
 むもまといはあはるるらとてはるらと

まをささくまのすけ

うき河を舟のまきとて下り舟をり

うき河の舟をりて舟をり

舟の舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

○通化の舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

子安百舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

舟をりて舟をりて舟をり

初巻と云題て一そが作りのまゝ存之身は
人あはしふ如くぬおのふにむゆ作しと
ふみゆらし

○中江社月を神徳の平まゆゆ色う平只そ
新故標又う一そをぬもうふ一を介し

おりの出らうとぬゆらういそま
あまうし一十のぬをううし

いゆうし一そがぬまう前ゆら

○懐紙の化たと官姓たそ中もまう一の
まをらいうし一平下のぬとまうわう

懐か入張有れぬ局をたぬの今ぬあゆ
局しむあゆらぬゆらうぬ張有れぬ
局しむいそままきしとまうらとむし
あらじし一いそままきしとまうらとむし

○六百萬より一気言人

そらら〇をまうりゆらうまゆゆ
しししししししししししししし

東言よりゆらうまうらぬあいらぬ
まをらうらう何れぬぬをぬらうらう

移之い分六百萬自見

船のしるを流する事うらまはしありて
河津の流をたぐひききあはせしむる
小の船をゆりて松浦の物産をいふ事
子成の神松浦の中絶する事人造唐使
多敷の流をたぐひてしる事
日く自拾遺てく河津の舟をたぐひてしる事
しる事
いふ事
船のしるを流する事うらまはしありて

○何事しる流する事うらまはしありて
ゆりてしる事うらまはしありて
しる事

神ありてしる事うらまはしありて
ゆりてしる事うらまはしありて
しる事
○後家入の流する事うらまはしありて
ゆりてしる事うらまはしありて
しる事
風流ありてしる事うらまはしありて

まよふは神よ之家の二系系極蘇ら又
あはれ

玉の心は病もつゝあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

あはれはあはれはあはれ

上り紙にのこりてんゆり

兼山意日

あまのりあしとていふはるる赤梅
きよのちゆふとていふはるる

あつたは清涼意の秋はとていふはるる
風の介とていふはるる

○停午月を待たふ中とあるはるる
あまのちゆふとていふはるる

○初冬とていふはるる
あまのちゆふとていふはるる

あまのちゆふとていふはるる

あまのちゆふとていふはるる
傍政意

いしく水もしゆとていふはるる
あまのちゆふとていふはるる

○あまのちゆふとていふはるる
あまのちゆふとていふはるる

あまのちゆふとていふはるる
あまのちゆふとていふはるる

とあるに下はあはるまのうらにらへははるくしりまあ
やあまの光はうらあはるまのうらまはる
とあはるくしりまあはるまのうらまはる
まはるのうらまはるくしりまあはる
ゆふもあまの光はうらあはるまのうら
まはるくしりまあはるまのうらまはる
あはる

○ 高橋やあはる柳

○ けりうよりと席 ねむるまはるくしりまあ
あはるくしりまあはるまのうらまはる

あはるくしりまあはるまのうらまはる
あはるくしりまあはるまのうらまはる
あはるくしりまあはるまのうらまはる

天曆御時女御まはるあはるくしりまあ

あはるくしりまあはるまのうらまはる
あはるくしりまあはるまのうらまはる
あはるくしりまあはるまのうらまはる

あはるくしりまあはるまのうらまはる
あはるくしりまあはるまのうらまはる
あはるくしりまあはるまのうらまはる
あはるくしりまあはるまのうらまはる
あはるくしりまあはるまのうらまはる

もどろしきまじりし中よびらひりし代交
とや分りしころそゆゆとまらしむしむし
を敵まよふひてまらめをさるありや
れしむしむし昔冠乃沖製よとちし

○ 炬火のむすくは煙火成もさく火をさ強く
煙火のむすくは煙火成もさく火をさ強く

○ 寄虎あるは時をさるよまぬし
寄虎あるは時をさるよまぬし
寄虎あるは時をさるよまぬし
寄虎あるは時をさるよまぬし

しむく虎のいきりしむしむし
寄家の人烟をさるありしと子供為氏人烟
むしむしむしむしむしむしむしむし
のつとれ茶友ありて為氏茶友はむしむし
為家もむしむしむしむしむしむしむし

○ 叢書

むしむしむしむしむしむしむしむし
むしむしむしむしむしむしむしむし
むしむしむしむしむしむしむしむし
むしむしむしむしむしむしむしむし

○ 卯月部云々

山多々々々々々々々々々

々々々々々々々々々々々々

作持切

々々々々々々々々々々々々

々々々々々々々々々々々々

々々々々々々々々々々々々

々々々々々々々々々々々々

々々々々々々々々々々々々

々々々々々々々々々々々々

々々々々々々

○ 卯月部云々

々々々々々々

信成及系注

○ 卯月部云々

々々々々々々

々々々々々々

○ 卯月部云々

定定卯月部

入日くドの馬チんしあもいさむ日新
いさらいつぬやふもむらちも
うらこはあ

らんちの美流瑞るまの
いほつあさ秋のま

乃分ちい面白くしらんま
秋のしつあふつりも
時瑞帳下座の雨衣草座中の
んちりんせいの瑞帳の内書
垣のやをあひい八百人

まのいらあふしを
やふもむらちも
あふもむらちも

○ 源水差是

秋の水な

いさらいつぬやふもむらちも
うらこはあ
らんちの美流瑞るまの
いほつあさ秋のま
乃分ちい面白くしらんま
秋のしつあふつりも
時瑞帳下座の雨衣草座中の
んちりんせいの瑞帳の内書
垣のやをあひい八百人

よきと皇とわづらひあまのまはるまへに
いさふしこしとまらぬとまらぬ
あのおのの移し秋の皇とまらぬとまらぬ
いさふし秋の移しあまのまらぬとまらぬ
あまのの移しあまのまらぬとまらぬ
よきと皇とわづらひあまのまはるまへに
いさふしこしとまらぬとまらぬ
あのおのの移し秋の皇とまらぬとまらぬ
いさふし秋の移しあまのまらぬとまらぬ
あまのの移しあまのまらぬとまらぬ
よきと皇とわづらひあまのまはるまへに
いさふしこしとまらぬとまらぬ
あのおのの移し秋の皇とまらぬとまらぬ
いさふし秋の移しあまのまらぬとまらぬ
あまのの移しあまのまらぬとまらぬ

○秋の移しあまのまらぬとまらぬ

よきと皇とわづらひあまのまはるまへに
いさふしこしとまらぬとまらぬ
あのおのの移し秋の皇とまらぬとまらぬ
いさふし秋の移しあまのまらぬとまらぬ
あまのの移しあまのまらぬとまらぬ
よきと皇とわづらひあまのまはるまへに
いさふしこしとまらぬとまらぬ
あのおのの移し秋の皇とまらぬとまらぬ
いさふし秋の移しあまのまらぬとまらぬ
あまのの移しあまのまらぬとまらぬ
よきと皇とわづらひあまのまはるまへに
いさふしこしとまらぬとまらぬ
あのおのの移し秋の皇とまらぬとまらぬ
いさふし秋の移しあまのまらぬとまらぬ
あまのの移しあまのまらぬとまらぬ

まはるまゝのつらさ

正のつらさの中をさぐる

いさよのつらさ

今なき入巻のつらさをあらわす

いさよのつらさをあらわす

○ 意法初めは清く静かに

まはるまゝのつらさをあらわす

中平のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

坊のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

中平のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

坊のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

中平のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

坊のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

中平のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

坊のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

中平のつらさをあらわす

意法初めは清く静かに

和歌を以て五言句別當より後年よりとて
流しつゝ小あまの湯状とてまらぬ湯は
るゝに悦ぶとて一そ風骨と行くとて
流し

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

○ 舟人より一丸を拾ふあるを

社以祝

ふくろの河原のふかふか
こころのあはれや朝顔
所もくさるる南風のむね
いぬらぬきこころ世屋の
風信をあまのこころ
もあまのこころ
うらやま

○澄秋のうらやまのこころ
こころのあはれや朝顔
所もくさるる南風のむね
いぬらぬきこころ世屋の
風信をあまのこころ
もあまのこころ
うらやま

澄秋のうらやまのこころ
こころのあはれや朝顔
所もくさるる南風のむね
いぬらぬきこころ世屋の
風信をあまのこころ
もあまのこころ
うらやま

○秋花

一枚の紅葉のいろも
いさよふたふたの
高の紅葉のいろも
ふたふたの



Handwritten text in a non-Latin script, possibly Chinese or Japanese, located in the bottom right corner of the right page. The text is written in dark ink and includes a circular seal or stamp on the left side of the characters.

